

# メディア・イベントと地方の観光化

## —昭和初期の讃岐十景選定を事例に—

大平 晃 久

### I. はじめに

「讃岐十景」は、1927年（昭和2年）8月～11月に、香川県内の観光地を対象として、香川新報社が人気投票形式で実施した観光地コンテストである。得票数や各観光地の動向は『香川新報』紙上で逐次報道され、各観光地は熾烈な当選運動を繰り広げた。

本稿では、この「讃岐十景」選定を、近代日本の観光化の1つの事例として取り上げる。アーリ<sup>(1)</sup>が論じたような、大衆化した近代的現象としての観光は、日本では1920年代に始まった。それを可能にした条件としては、安全で高速・大量にツーリストを輸送することができる鉄道網の形成、経済的に豊かで、大正期における大衆文化の担い手ともなった都市新中間層の増加、そしてそれらを下支えし、直接的には観光産業の成立を促した資本主義経済の進展などをあげることができる。そのようにとらえるならば、大きな問題構制としての近代日本の観光化は、鉄道の発達や都市の成長に代表される、近代における空間の再編成の一環として位置づけられよう。

空間の再編成として近代の観光をとらえた研究としては、白浜の観光化とその「境の場所」観を明らかにした神田による論考<sup>(2)</sup>や、四国遍路の変化をとらえた森による論考<sup>(3)</sup>、瀬戸内海航路による観光空間の形成を論じた斎藤による論考<sup>(4)</sup>などをあげることができる。また、より大スケールの空間である国民国家の再編・強化とのかかわりから近代日本の観光をとらえた研究も、日本国内、あるいは植民地・勢力圏に至るまで幅広く取り組まれている<sup>(5)</sup>。ルオフによる論考<sup>(6)</sup>は、時代はやや下がるが、観光とナショナリズムの関係を魅力的に論じている。

この時期の観光地コンテストとして最も著名なのは、「讃岐十景」と同じ1927年に大阪毎日新聞社と東京日日新聞社が主催した「日本新八景」選定である。一般投票と専門家の討議によって、海岸、山岳、渓谷などの8つのカテゴリーから1つずつ、8つの観光地が選定された。選定に当たっては、各地で激しい当選運動が起こったこと、従来の名所・旧跡とは異なる、後の国立公園につながる新しい風景観が提示されたことなどが知られている<sup>(7)</sup>。「日本新八景」以外にも新聞社によるメディア・

イベントとしての観光地コンテストは数多く実施されており、新潟毎日新聞社による「本県中心近接地方十二名勝」(1927年)<sup>(8)</sup>、国民新聞社による「全国温泉十六佳選」(1930年)<sup>(9)</sup>、神戸又新日報社による「大神戸新八景」(1932年)<sup>(10)</sup>などが紹介されている。

「讃岐十景」選定は、こうした数多くの観光地コンテストの一つであり、とりたてて珍しい事例ではないが、ここで取り上げる意義は十分にあると考えている<sup>(11)</sup>。その理由として、まず、「讃岐十景」選定をめぐっては、短期間の『香川新報』紙上に各観光地の思惑や施策が集約されており、昭和初期の一地方の観光化を具体的に把握できることがある。また、「讃岐十景」は、「日本新八景」選定の直後に、国立公園の指定でも大いに盛り上がりを見せていた香川県において実施された点から注目できることもあげられる。

次章では、「讃岐十景」がどんな観光地コンテストであり、メディア・イベントとしてどんな特色があったか、先行する2つの観光地コンテストと比較しつつみていく。Ⅲでは、どんな観光地が「讃岐十景」当選を目指し、当選したかをみることを通して、昭和初期の香川県における、あるいは全国に共通する観光化の要因を考える。

### II. メディア・イベントとしての「讃岐十景」

#### (1) 「讃岐十景」と先行する2つの観光地コンテスト

「讃岐十景」選定を主催した香川新報社は、1889（明治22）年に『香川新報』を創刊、現在、香川県紙である『四国新聞』を発行する四国新聞社の直接の前身に当たる新聞社である。やや時代は下がるが1937年末時点での県内配達部数は4,138部で、この数字は2万部を超える『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』をかなり下回り、『四国民報』、『大阪時事新報』とほぼ並ぶものであった<sup>(12)</sup>。

「讃岐十景」選定のように、マス・メディアが企画・演出するメディア・イベントは、明治後期からさかに行われるようになった<sup>(13)</sup>。香川県においても、早くも1904（明治36）年には讃岐実業新聞社主催で「讃岐十二景」の選定が行われている。ただしこれは投票によるものではなかった。

表 1. 関係する観光地コンテストの比較

名称 (主催紙)	発表～決 定の期間	選定方法
四国十二景 (大阪時事新報)	1927年 3月～7月	一般投票 (はがき使用)
日本新八景 (大阪毎日新聞 東京日日新聞)	1927年 4月～7月	一般投票(はが き使用) + 専門家の討議
讃岐十景 (香川新報)	1927年 8月～11月	一般投票(新聞 刷込の用紙また ははがき使用)

香川新報社による「讃岐十景」選定の直前には、上述した「日本新八景」だけでなく、大阪時事新報社主催による「四国十二景」という観光地コンテストも同時に行われている。表1ではこの3つの観光地コンテストを比較しておいた。また、「日本新八景」と「四国十二景」の2つのコンテストにおいて、香川県内のどの観光地が投票を組織化し、1万票以上得票したかを示したのが表2である。「日本新八景」で1万票以上得票したのは7ヵ所で、県内最高得票は屋島の103万票、「四国十二景」で1万票以上得票したのは15ヵ所で、県内最高得票は仁尾平石の51万票であった。同時期であるにもかかわらず、屋島(「四国十二景」では屋島と長崎ノ鼻の2ヵ所)、有明浜(「四国十二景」では琴弾公園)、寒霞溪、香色山(「四国十二景」では屏風浦善通寺)、瀧ノ宮(「四国十二景」では滝宮綾川)は双方にまとまった組織票を出している。なお、屋島は最終的には「日本新八景」で「二十五勝」に入選したが、新聞社が発表した得票数が地元で差し出した数よりも少なくとも10数万票少ないとして、一時は大阪毎日新聞社と東京日日新聞社を裁判で訴えるというようなことまで起こった<sup>(14)</sup>。香川県内の観光地が、「日本新八景」と「四国十二景」で尋常ならざる盛り上がりを見せていたことがわかる。

表 2. 「日本新八景」・「四国十二景」で得票の多かった観光地

日本新八景	屋島(高松市)、有明浜(観音寺市)、寒霞溪(小豆島町)、香色山(善通寺市)、瀧の宮(綾川町)、津田の松原(東かがわ市)、白鳥浦(東かがわ市)
四国十二景	仁尾平石(三豊市)、屏風浦善通寺(善通寺市)、滝宮綾川(綾川町)、栗林公園(高松市)、象頭山(琴平町)、屏風浦海岸寺(多度津町)、詫間弁天山(三豊市)、琴弾公園(観音寺市)、寒霞溪(小豆島町)、屋島(高松市)、津田松原(東かがわ市)、引田海岸(東かがわ市)、讃岐富士(丸亀市)、長崎ノ鼻(高松市)、仏生山(高松市)

注) 香川県内で1万票以上の得票のあった観光地を得票順に示した。太字が当選地(屋島:二十五勝、寒霞溪:百景)。なお( )内は現在の市町名。

では、そのような中で実施された「讃岐十景」選定は、どのようなイベントであったかみていきたい。「讃岐十景」選定の社告(図1)は、1927年8月17日の紙面に初めて掲載された。その中では、「讃岐十景の名勝を募る」として、「古昔より天下に知れ渡った名勝旧蹟のほかには隠れたる歴史的由緒ある勝景絶佳の地」を「天下に公表紹介」というイベントの目的が示されている。当選観光地に対しては、『香川新報』紙面や高松市で翌1928年に開催される全国産業博覧会(3月20日～5月10日)で写真を展示し一般への紹介を行うとされた。「日本新八景」、「四国十二景」と「讃岐十景」が大きく異なるのが投票・選定方法である(表1)。「讃岐十景」では、はがき、または新聞に刷り込まれた投票用紙で投票し、その得票数のみで当選が決定されるとされた。「日本新八景」のような専門家の討議を経ずに、人気投票で決定する点は「四国十二景」も同じだが、新聞に投票用紙が刷り込まれた点で「四国十二景」とは異なっている。

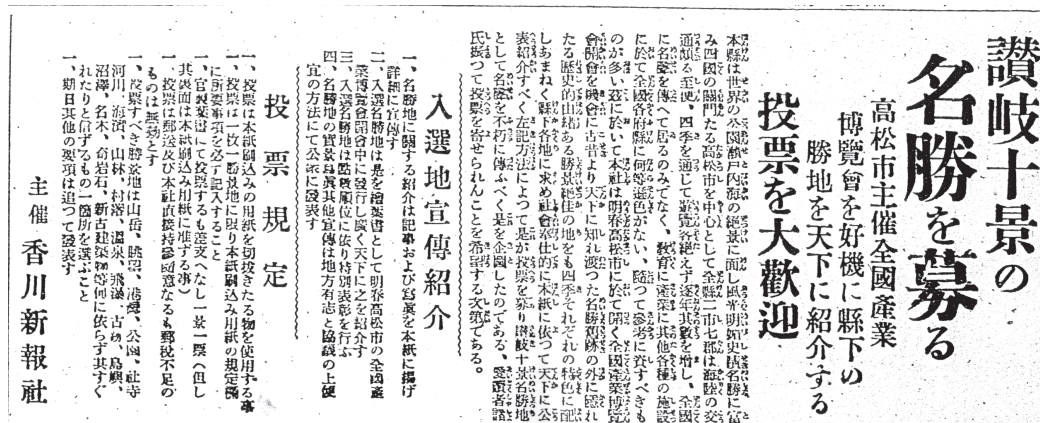


図 1. 「讃岐十景」選定の社告

香川新報 1927年8月17日



集につとめる」<sup>(22)</sup>のように、投票用紙（『香川新報』紙）を収集しようとする個人的な奮闘や、「力瘤を入れる／保勝会／淵崎八幡宮」<sup>(23)</sup>、「挙郡一致で白峰寺に投票／坂出町有志の画策」<sup>(24)</sup>、「長尾町の／投票白熱化／巨弾発射の協議」<sup>(25)</sup>といった各地の当選運動組織化の動きが逐一報道されている。また、「貴重なる五票を／丸亀城に投票してください」<sup>(26)</sup>、「塩木荒魂神社に／同情して下さい／吉津村民よ起て／西讃 横澤生」<sup>(27)</sup>といった地元からの投書、「満州から／城山投票／山田氏の愛郷心」<sup>(28)</sup>、「二百幾票とは／実に情ない／奮って下さい 郷里の諸兄よ／朝鮮平壤にて 山本生」<sup>(29)</sup>のように、遠く海外から故郷への思いを込めて寄せられた投書が連日のように掲載されている。あるいは、投票が村の結束を生み小作争議が解決したという一種の美談までが掲載された<sup>(30)</sup>。

組織的投票が煽られたこともあり、各地の組織的投票の動きは加熱したものとなった。投票開始45日後の10月25日の中間締切時点で、第1位安原最明寺は64万票余り、10位までは40万票を上回っている<sup>(31)</sup>。すべて新聞刷り込みの投票用紙が用いられたとして、第1位の安原最明寺は毎日平均して2300部程の『香川新報』を集めていたことになる。

香川新報社では、10月25日の中間締切時点の上位5観光地はたとえ最終で落選しても準入選とする、という

得票上位候補地の優遇策を示した<sup>(32)</sup>。しかし、中間締切後に得票上位候補地の間で「軍縮」、すなわち組織的投票の自粛と、中間締切時点の得票上位候補地をそのまま当選させよとの要望などが取り決められた<sup>(33)</sup>。結果として香川新報社でもこれをほぼ受け入れる形で、十景に加え五景、五勝、特選の追加選定、投票期間の短縮（締切を11月30日から11月10日へ）、新聞刷り込み投票用紙の1部あたり5枚から1枚への削減が急遽実施された<sup>(34)</sup>。

このようにいわば尻すぼみになり、中間締切以後は「全讃に／平和の気漲る／軍縮－休戦－夢の世界」<sup>(35)</sup>という見出しが示すような状態のまま推移した。決議に参加しなかった候補地をも含む一種の「談合」状態であったことは、得票数第10位の仏生山法然寺と11位の根来寺が最終的に同じ得票数になっている<sup>(36)</sup>ことから推測される。

最終的に当選した観光地は表3・図3の通りである。得票数20位までが順に「讃岐十景」、「讃岐五景」、「讃岐五勝」として当選し、そのほかに別格の「特選」として5ヵ所が選定された<sup>(37)</sup>。当選した観光地については、新聞紙上で写真つきで紹介され、また、翌春に高松市で開催された全国産業博覧会<sup>(38)</sup>において写真パネル展示・絵はがき販売などが行われた。また各当選地には、香川新報社の寄贈で、旧高松藩主家出身の松平頼寿伯爵の揮

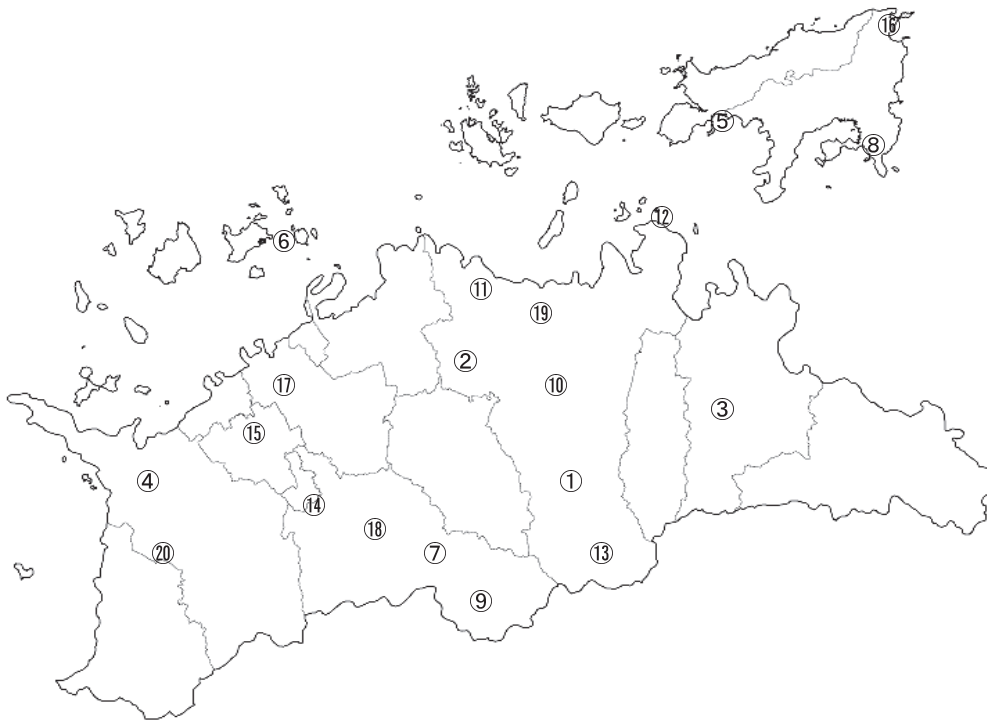


図3. 「讃岐十景」当選地の位置図

注) 「特選」は除く。番号は表3の備考欄に対応している。

表3. 「讃岐十景」当選・得票上位観光地

当選区分	得票数	観光地	所在地	備考
讃岐十景	646,962	安原最明寺	高松市	①
	644,259	国分寺	高松市	②
	626,945	亀鶴公園	さぬき市	③
	606,286	塩木荒魂神社	三豊市	④
	551,710	淵崎八幡山	土庄町	⑤
	550,316	塩飽諸島	丸亀市	⑥
	549,341	造田天川神社	まんのう町	⑦
	518,324	坂手洞雲山	小豆島町	⑧
	480,210	美合三霞洞八景	まんのう町	⑨
	459,398	仏生山法然寺	高松市	⑩、四国十二景上位選外（仏生山）
讃岐五景	459,398	根香寺	高松市	⑪
	457,673	庵治竹居観音	高松市	⑫
	427,018	塩ノ江温泉	高松市	⑬
	417,034	榎井日柳燕石碑	琴平町	⑭
	411,705	金倉寺	善通寺市	⑮
讃岐五勝	286,144	福田水晶山	小豆島町	⑯
	138,404	丸亀城	丸亀市	⑰
	132,502	満濃池	まんのう町	⑱
	126,026	石清尾八幡宮	高松市	⑲
	78,823	本山寺	三豊市	⑳
選外	71,625	豊浜一宮神社	観音寺市	
	62,593	四国霊場大窪寺	東かがわ市	
	41,698	香西立石遊園地	高松市	
	40,968	一ノ宮田村神社	高松市	
	33,451	西方寺遊園地	高松市	
	23,247	小部恵門ヶ瀧	土庄町	
	21,682	常盤植田天神松	高松市	
	21,356	井戸和爾賀波神社	三木町	
	20,767	引田城山	東かがわ市	四国十二景上位選外（引田海岸）
	15,094	栗井不動山	観音寺市	
	14,369	三豊河内神社	三豊市	
	12,921	屏風浦海岸寺	多度津町	四国十二景上位選外（屏風浦海岸寺）
	12,465	小海松茸山遊園地	土庄町	
特選	5,984	栗林公園	高松市	四国十二景
	1,875	屋島	高松市	日本新八景、四国十二景上位選外（屋島、長崎ノ鼻）
	594	金刀比羅宮	琴平町	四国十二景（象頭山）
	953	神懸	小豆島町	日本新八景（寒霞溪）、四国十二景上位選外（同）
	1,274	白峰山	坂出市	投票時は白峰寺

注) 当選観光地と1万票以上得票の落選風景地を記載した。所在地は現在の市町名。備考欄の数字は図3に対応している。

毫になる石碑が建てられている。

その他の取り組みとしては、小豆島の坂手洞雲山、淵崎八幡山の2当選地に『香川新報』で宣伝した団体客を送り込んでいることがあげられる<sup>(39)</sup>。ただし、これは1回限りで終わった。当選観光地の間で宣伝などの面で協力を図るといった計画も報道されたが<sup>(40)</sup>、実現し

た様子はない。その後の国立公園指定誘致をめぐる動きのなかでも「讃岐十景」に言及されることはなく、結局、「讃岐十景」選定は大いに盛り上がったものの、一過性のイベントであったといわざるを得ない。

### Ⅲ. 「讃岐十景」候補地と観光化

#### (1) 投票に表れた観光化の動き

「讃岐十景」選定が大きな盛り上がりを見せたメディア・イベントであったことをここまでみてきた。以下では、どんな観光地が「讃岐十景」当選を目指したか、すなわちどんな観光化の動きが読みとれるか、3つの点から検討していきたい<sup>(41)</sup>。

まず指摘できるのは、「日本新八景」、「四国十二景」で得票の多かった観光地は、「讃岐十景」の上位にほとんど現れないということである。例えば、屋島は「日本新八景」で県内最高得票の103万票余りを得たものの、「讃岐十景」ではわずか1,875票、同様に「四国十二景」で51万票を得て2位で当選した仁尾平石も1,120票に過ぎない。3つの観光地コンテストが続き、資金的に続かなかった観光地が多かったものと想像される。結果として、「讃岐十景」に当選した観光地には、「日本新八景」、「四国十二景」に比べ無名の場所が多い。「讃岐十景」に「特選」として著名観光地が追加されたのは、無名の観光地が上位をほぼ独占したという事情を反映しているといえるだろう。

また、表4に示したように、当選した観光地は、江戸時代の名所図会や明治・大正期の案内書に載った名所・旧跡が大半を占めている。それ以外の当選観光地や上位で選外となった観光地も、大半が旧来からの名所・旧跡であったといえる。前章でみたように、これは「讃岐十景」を選定した香川新報社側の観光地観でもあった。

2点目として、国立公園指定に向けて期待が高まっていた観光地が上位に多く入っていることが指摘できる。屋島と小豆島が瀬戸内海国立公園の中心として位置づけられていたことは良く知られている。例えば、当時内務省で国立公園関係の調査に従事していた林学博士の田村剛は、「日本の国粹を代表する／我国立公園の候補地／屋島や小豆島も」と題された一文を『香川新報』に載せている<sup>(42)</sup>。

当時の新聞各紙では国立公園調査の動向が詳細に伝えられ、「讃岐十景」選定の直前、1927年6月には、「『本県小豆島』／国立公園に内定／近く調査会を新設」という記事までみられた<sup>(43)</sup>。「讃岐十景」5位当選の淵崎八幡山は「国立公園の勝地」といささか気の早い紹介をされている<sup>(44)</sup>。

しかし、当時の香川県内における国立公園への期待は、

表4. 「讃岐十景」当選地の名所図会・地誌における記述

	金毘羅参詣 名所図会 (1847)	讃岐国 名勝図会 (1853~)	小豆島 名所図会 (幕末)	讃岐 名勝地誌 (1899)	旅行 独案内 (1902)	讃岐案内 (1902)	小豆島 案内 (1911)	香川県 案内 (1925)
福田水晶山			○					
坂手洞雲山			○	○	○	△	○	△
淵崎八幡山			○	△			○	△
亀鶴公園		○						△
庵治竹居観音		○						
石清尾八幡宮	○	○		○	○			△
仏生山法然寺		○		○	○	△		△
安原最明寺		○		○	○	△		△
塩ノ江温泉		○		○	○	○		△
根香寺	○	○		○	○	△		△
国分寺	○	○		○		△		△
造田天川神社		○						△
美合三霞洞八景								
塩飽諸島	○	○		○		△		△
丸亀城	○	○		○	○			△
金倉寺	○	○		○	○	△		△
榎井日柳燕石碑								
満濃池	○	○		○	○	△		△
塩木荒魂神社		△						△
本山寺	○	○		○	○	△		△

注) 「特選」は除き、当選観光地を東から順に配列した。○は記述が詳しいこと、△は記述が少ないこと、空欄は記述が全くないことを示す。

屋島と小豆島に限られるものではない。塩飽諸島本島村では1923年にすでに「瀬戸内海保勝会」が組織されている<sup>(45)</sup>。1929年には香川県国立公園期成同盟会が組織されるが<sup>(46)</sup>、そこには内陸の琴平や長尾（亀鶴公園が所在）<sup>(47)</sup>、仏生山（法然寺が所在）、塩江（塩ノ江温泉が所在）なども参加している。今日われわれが考える以上に、広範囲の観光地が国立公園指定を意識していたとみなければならない。

また、当時は国立公園指定のほか、県内各所で史蹟・名勝・天然記念物の調査や指定もまた注目を集めていた。すでに1923年に神懸山（寒霞溪）が名勝に指定されており、「讃岐十景」当選の国分寺、国立公園指定に向けて沸く小豆島の皇子神社社叢は、「讃岐十景」と同時期にそれぞれ史蹟、天然記念物への指定内定が報じられている（指定は1928年1月）。

このように、「讃岐十景」当時の香川県では、国立公園や、史蹟・名勝・天然記念物への指定が大きな注目を集めていた。言い替えれば、観光地に対する国立公園のような国からの格付け獲得に関心が注がれていたといえる。荒山に倣うならば、観光地のナショナルな「規律化」<sup>(48)</sup>が国家の側から、またローカルな側からも進んでいたといえるだろう。「讃岐十景」はその一端を担ったとみることができる。

最後に、3点目として、高松近郊の観光地が多く当選していることが指摘できる。亀鶴公園、仏生山法然寺

はそれぞれ高松電車（高松電気軌道）、琴平電鉄の沿線に位置しており、沿線観光地として開発が行われていた<sup>(49)</sup>。造田天川神社、美合三霞洞八景は電車の沿線ではなくバス乗り継ぎを要するが、新聞紙上では琴平電鉄の開通によって高松から著しく便利になったことが強調されている<sup>(50)</sup>。電車開通のインパクトの大きさをうかがい知ることができよう。また、安原最明寺、塩ノ江温泉も同様に高松近郊のバス沿線に位置しており、近郊観光地と位置づけられる（図4）。この2年後に塩江温泉鉄道が開通し、とりわけ塩ノ江温泉は「四国の宝塚」として本格的に観光開発が進められていくことになる<sup>(51)</sup>。その他、根香寺は琴平参宮電鉄の坂出・高松間延長計画があり、紙面ではその期待が語られていたが、結局延長は実現しなかった<sup>(52)</sup>。

このように、鉄道やバス路線の開通に伴って、従来からの名所・旧跡が高松近郊の観光地として位置づけ直されているといえる。その過程で、一部の観光地によって「讃岐十景」当選が目指されたといえるだろう。

## (2) 新しい風景観のきざし

前章で、「讃岐十景」では主催者によって風景観は示されなかったと述べた。また、その結果として、当選したのは従来型の名所・旧跡が大半であることを示した。しかし、「讃岐十景」選定の中で、新しい風景への見方がまったく示されなかったわけではない。

それはまず、多数の村にまたがる大スケールの景観（塩飽諸島、高松アルプス＝67位）である。ただし、塩飽諸島は各種の名所図会でもこのスケールで紹介されているので、新しいとはいえないかもしれない。次に、自然科学的・地形学的な見方に基づくものがある。すなわち、白鳥ランプロハイヤ（50位）、財田盆地（62位）、高松アルプスなどがそうである。人工的な新しい景観として、郊外住宅地の挿頭丘（47位）も付け加えておきたい。このように、得票が少ないものがほとんどであるとはいえ、「讃岐十景」選定には、「日本新八景」で示されたような、新しい風景観の波及を読みとることができるだろう。

また、従来からの名所・旧跡であっても、パノラマ景的な眺望が特に強調されている例があることも指摘できる。西田は、瀬戸内海国立公園指定の時期に、島々が分散するパノラマ景が重視されたことを論じている<sup>(53)</sup>。小豆島の2当選地、淵崎八幡山と坂手洞雲山は、西田がいうところのパノラマ景展望地であるといえる。すなわち、両者ともに海岸から近く、標高もそれぞれ69m、220～250mで適度に上から見下ろす位置である。『香川新報』には、淵崎八幡山と坂手洞雲山への観光団の宣

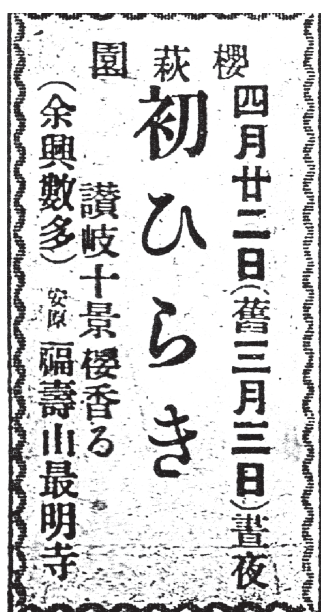


図4 安原最明寺の新聞広告  
香川新報 1928年4月19日

伝のために淵崎八幡山の写真1枚、坂手洞雲山の写真2枚が掲載されているが<sup>(54)</sup>、そのうち洞雲山の洞窟以外は両当選地からのパノラマ景写真である。また、そのほかに記事にもパノラマ景的な眺望に触れた部分もある。このように、パノラマ景的な海上の景観を強調することも、「讃岐十景」選定の中で示された新たな風景観としてとらえることができると考えられる。

#### IV. むすび

本稿では、空間の再編成として近代の観光をとらえ、さらに、近代日本の観光化の一事例として「讃岐十景」選定を位置づけ、検討を行ってきた。ここまでの検討は次のようにまとめられる。

Ⅱにおいては、メディア・イベントとしての「讃岐十景」選定の姿を浮かび上がらせようと試みた。「讃岐十景」は先行する2つの観光地コンテストに比べ、販売促進策としての色合いが強かったこと、一過性のもので終わったとはいえ、当選運動は大きな盛り上がりを見せたこと、明確な風景観が示されていなかったことを明らかにした。

続いてⅢでは、候補地側の当選運動への参入要因、すなわち観光化への動きを主に検討した。従来型の名所・旧跡が大半で、無名の観光地が上位を占めていること、一方で、国立公園指定に向けた期待と、高松の郊外観光地化が当選運動への参入に影響したと考えられることを示した。さらに、大スケールの景観、自然科学的・地形学的な風景、パノラマ景的な海上の景観といった新しい風景観のきざしが読みとれることを明らかにした。

以上の「讃岐十景」の事例からは、近代日本の観光化一般について、次の2点を提示することができると思われる。

i) メディア・イベントとしての観光地コンテストが、地方の観光化に一定の役割を果たした。

ii) 地方の観光化として、国立公園に代表されるナショナルな「規律化」と、都市近郊観光地形成の2つが大きな要因として指摘できる。

なお、iiには3つ目の要因として、新しい風景観の影響も加えてよいかもしれない。それら、iiの2つないし3つの要因はいずれも近代化な空間再編成の一環であることも強調されよう。

#### 注

- (1) アーリ、J. 著、加太宏邦訳『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと観光』法政大学出版局、1995（原著1990）。
- (2) 神田孝治「南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性—近代期における観光空間の生産についての省察」人文地理 53-5、2001、24-45頁。
- (3) 森 正人「近代における空間の編成と四国遍路の変容—両大戦間を中心に」人文地理 54-6、2002、535-556頁。
- (4) 斎藤枝里子「近代日本における船旅とツーリズム空間の形成」（神田孝治編『観光の空間—視点とアプローチ』ナカニシヤ出版、2009）26-35頁。
- (5) 千田 稔『高千穂幻想—「国家」を背負った風景』PHP研究所、1999。梅田秀春「ローカル、グローバル、もしくは『ちゃんぶる』—沖縄観光における文化の多様性とその真正性をめぐる議論」（橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化—南からの問いかけ』世界思想社、2003）83-111頁。神田孝治「戦前期における沖縄観光と心象地理」都市文化研究 4、2004、11-27頁。荒山正彦『「内地」と「外地」をめぐる海上ツーリズム—戦前期における日本一周船と日支周遊船』関西学院史学 37、2010、1-17頁。
- (6) ルオフ、ケネス著、木村剛久訳『紀元二千六百年—消費と観光のナショナルリズム』朝日新聞出版、2010（原著2010）。
- (7) 「日本新八景」については次を参照。白幡洋三郎「日本八景の誕生—昭和初期の日本人の風景観」（古川 彰・大西行雄編『環境イメージ論—人間環境の重層的風景』弘文堂、1992）277-307頁。荒山正彦「風景のローカリズム—郷土をつくりあげる運動」（「郷土」研究会編『郷土—表象と実践』嵯峨野書院、2003）90-107頁。また、一地方における「日本新八景」当選運動については次の千葉県における事例報告がある。赤坂 信ほか「昭和初期における千葉県立公園の成立と背景」千葉大学園芸学部学術報告 57、2003、35-44頁。
- (8) 矢野敬一「戦国武将の顕彰と祭礼の誕生—名勝の発見とメディア・イベント」（同『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館、2006）180-209頁。
- (9) 関戸明子『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版、2007。
- (10) 飯塚隆藤・加藤めぐみ「花見空間の創出」（神田孝治編『観光の空間—視点とアプローチ』ナカニシヤ出版、2009）35-44頁。
- (11) 香川新報社の後継である四国新聞社の社史では、この「讃岐十景」について、十景と別格特選の三景（屋島、金刀比羅宮、栗林公園）を選定したという全く誤った記述がなされている。史実の解明も本稿の目的の一つである。四国新聞社編『四国新聞六十五年史』四国新聞社、1955、80-81頁。なお、筆者は以前の別の論文で「讃岐十景」に触れたことがある。拙稿「対立する記憶と場所—小港町・香川県汐木をめぐる歴史意識」歴史地理学 46-5、2004、25-39頁。
- (12) 香川県編『香川県史 6 近代Ⅱ』四国新聞社、1989、433頁。
- (13) 山本武利「草創期のメディア・イベント」（津金澤聡廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館出版、1995）31-59頁。
- (14) 「大阪毎日を相手取り／屋島当選確認訴訟を提起す／調査粗漏に基くものとして／日本新八景たる」香川新報 1927年6月7日。「屋島が特選となり／当選確認訴訟／十三日に取り下げた」香川新報 1927年6月14日。
- (15) このような新聞刷り込みの用紙で人気投票を行う方式は「桐原式」と呼ばれた。津金澤聡廣「大阪毎日新聞社の『事業活動』と地域生活・文化—一本山彦一の時代を中心に」（津金澤聡廣



- 編『近代日本のメディア・イベント』同文館出版、1995) 219頁。
- <sup>(16)</sup> 現在閲覧できる『香川新報』は原紙・マイクロフィルムともに僅かに切り取りがあり、すべての「候補地」を知ることにはできない。
- <sup>(17)</sup> 香川新報 1927年9月29日。
- <sup>(18)</sup> 香川新報 1927年10月4日。
- <sup>(19)</sup> 香川新報 1927年10月1日。
- <sup>(20)</sup> 香川新報 1927年10月3日。「太文字で居る」とは紙面で大きな文字で表示される上位を維持するということ。
- <sup>(21)</sup> 香川新報 1927年9月19日。
- <sup>(22)</sup> 香川新報 1927年10月13日。なおこれは榎井日柳燕石碑の運動の報道。
- <sup>(23)</sup> 香川新報 1927年9月16日。
- <sup>(24)</sup> 香川新報 1927年10月6日。
- <sup>(25)</sup> 香川新報 1927年10月8日。
- <sup>(26)</sup> 香川新報 1927年10月3日。
- <sup>(27)</sup> 香川新報 1927年10月17日。
- <sup>(28)</sup> 香川新報 1927年10月5日。なお「城山」とは引田城山。
- <sup>(29)</sup> 香川新報 1927年10月13日。なおこれは七箇村(現、まんのう町)出身者によるもの。
- <sup>(30)</sup> 「小作争議の念転じ／神社中心主義と化す／必勝を期する造田村天川神社氏子／十景投票が産んだ美談」香川新報 1927年10月8日。
- <sup>(31)</sup> 香川新報 1927年10月27日。
- <sup>(32)</sup> 香川新報 1927年10月1日。
- <sup>(33)</sup> 香川新報 1927年10月27日。中間締切時点第1位の安原最明寺はこの取り決めに賛同しているが決議には加わっていない。2位の国分寺と6位の塩飽諸島は取り決め自体に参加していない。
- <sup>(34)</sup> 香川新報 1927年11月1日。
- <sup>(35)</sup> 香川新報 1927年11月3日。
- <sup>(36)</sup> 香川新報 1927年11月11日。
- <sup>(37)</sup> 香川新報 1927年11月21日。
- <sup>(38)</sup> 1928年3月20日～5月10日、高松市主催で高松城跡とその西側、現在の中央通り付近で開催。入場者数は48万7,399人を数えた。高松百年史編集室編『高松百年史 上巻』高松市、1988、498-504頁。
- <sup>(39)</sup> 観光団の募集告知によれば、主催は尼崎汽船高松支店、香川新報社が後援。4月1日に汽船2隻をチャーターすることで最大1600人乗船可能とされた。香川新報 1928年3月15日。ただし、実際の参加は200余名であった。同 1928年4月3日。同行した高浜虚子が紀行文「坂手淵崎聖島巡礼」を4回連載している(4月3日～7日)。
- <sup>(40)</sup> 前掲 37)。
- <sup>(41)</sup> 榎井日柳燕石碑はその1年ほど前に石碑が建立されたばかり、丸亀城は陸軍省から払い下げられ公園になった直後、といった個別の要因がうかがえる観光地もある。
- <sup>(42)</sup> 香川新報 1926年2月24日。
- <sup>(43)</sup> 香川新報 1927年6月14日。
- <sup>(44)</sup> 香川新報 1927年10月27日。
- <sup>(45)</sup> 香川新報 1923年12月14日。
- <sup>(46)</sup> 香川新報 1929年5月19日。
- <sup>(47)</sup> 長尾の参加は『瀬戸内海論』の著者で瀬戸内海国立公園制定に関わった代議士の小西 和の出身地であることも影響しているのではないかと。町史によれば、田村博士が亀鶴公園を激賞したというが、これは小西の地元に対するリップサービスかもしれない。長尾町『改訂長尾町史 下巻』長尾町、1986、735頁。
- <sup>(48)</sup> 荒山正彦「自然の風景地へのまなざし」(大城直樹・荒山正彦編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求』古今書院、1998) 141頁。
- <sup>(49)</sup> 拙稿「戦前期の郊外住宅地開発と近代化—高松市郊外の挿頭丘住宅地を事例として」地域と環境 8・9、2009、363-376頁。
- <sup>(50)</sup> 香川新報 1927年10月19日、同10月28日。
- <sup>(51)</sup> 前掲 49)。
- <sup>(52)</sup> 香川新報 1927年9月17日。
- <sup>(53)</sup> 西田正憲『瀬戸内海の発見—意味の風景から視覚の風景へ』中央公論新社、1999、218-222頁。
- <sup>(54)</sup> 香川新報 1928年3月23日。